

星蝕みの決闘者

verしよーた

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

遊戯王の世界に主人公がきてしまつた？
的な感じの始まりです

目

次

出会い

決闘者

侵略の龍

傀儡使い

焰を統べる者

41 26 12 7 1

出会い

僕は今、夢のような世界にいる…

リアルソリッドビジョンによつてモンスターが現れプレイヤーに攻撃している…
本当に夢なのかと思つたがそうでもない。

でも、残念なことがある…

今僕はデツキを持つていないので…

それにデュエルディスクも持つてない…

「は〜、せつかくこんな夢の世界にいるのに…」

つてか俺どこで暮らせばいいんだろ?

帰れるのかな?…あれ?俺の元いた街つてどんな街だつたつけ:
ダメだ…思い出せない…

当てもなくフラフラと歩いていると前で決闘をしてる人がいた…
どうやら揉めているようだ。

「おい、負けたんだからお前のカードを俺に渡せよ。」

「なんでつ、そんな約束…」

「文句あんのか？負けたくせに。」

どうやらアニメとかでよくあるアンティルールみたいだ。

「ほら、お前のエースモンスター・ギミック・ペペット—ネクロドールを俺にくれよ。」
ギミック・ペペット？ランク8エクシーズのデッキか…
あのデッキって強かつたような気がする。

相手のデッキはなんだつたんだろ？

「早く渡せよ。」

「ああっ、私のカード…」

「そのカード勝手に奪つていいいんですか？」

いつの間にか僕の口が動いていた…

「あ？てめえなんか文句でもあんのか？」

「文句があるなら決闘だ。」

「俺が負けたら返してやるよ。」

…なんでそーなる。

今僕はデツキを持つてない…
デュエルディスクも…

「え、いや、あのいま僕…」

「なんだお前? 決闘者じやねえのか?」

だつたら口を挟むんじやねえ。』

えーっとどうしよう…この子にデツキを借りようかな…

どうしよう…この子にあのカードを返さないと…

『君に我らの力を託そう。』

不意に僕のポケットが光だす…

それと同時にポケットに重みが伝わる。

ポケットを探るとデツキがある…

今の声はなんだつたんだろう。

…そんなことより今は何のデツキかはわからないけどやるしかない。

「君…デュエルディスク貸してくれる?」

「ごめんなさい私のせいで…」

「気にしなくていいよ、僕が勝手にやつたことだしね。」

「さあ始めようか。てめえが勝つたらこのカードは返す、俺が勝つたらこのカードはも

らっていく…いいな?」

「ああ、約束は守れよ。」

『デュエル!』

さてと、手札は…つてヴエルズ?

こんなカード見たことないな…

「先攻はいただくぜ。」

後攻スタートか…相手の出方をうかがえるし…まあ、いいか。

「俺は手札から魔法カード発動!」

早速魔法カードか…

「俺はトレード・インを発動!」

手札から青眼の白龍を墓地に送りカードを一枚ドローする。」

まさか相手のデッキは…

「さらにフィールド魔法竜の渓谷を発動する。」

△竜の渓谷△

フィールド魔法（制限）

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に手札を1枚捨て、以下の効果から1つを選択して発動できる。

● デツキからレベル4以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

● デツキからドラゴン族モンスター1体を墓地へ送る。

「手札からエクリプス・ワイバーンを捨てて効果発動。

デツキから嵐征竜テンペストを墓地に送らせてもらう。」

「さらにエクリプスワイバーンの効果発動。

デツキからレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンを除外する。」

「エクリプス・ワイバーン」

効果モンスター

このカードが墓地へ送られた場合、デツキから光属性または闇属性のドラゴン族・レベル7以上のモンスター1体をゲームから除外する。

その後、墓地のこのカードがゲームから除外された場合、このカードの効果で除外したモンスターを手札に加える事ができる。

「墓地の嵐征竜テンペストの効果発動。

墓地のエクリプスワイバーンと青眼の白龍を除外して特殊召喚する。」

「さらに除外されたエクリプス・ワイバーンの効果でレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンを手札に加える。」

やばいな、このままやられると…

「手札のレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンの効果でテンペストを除外して特殊召喚する。」

「レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン」
効果モンスター（制限）

（1）：このカードは自分フィールドの表側表示のドラゴン族モンスター1体を除外し、手札から特殊召喚できる。

（2）：1ターンに1度、自分メインフェイズに発動できる。

自分の手札・墓地から「レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴン」以外のドラゴン族モンスター1体を選んで特殊召喚する。

「レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンの効果で手札の青眼の白龍を特殊召喚。」「俺はこれでターンエンド。」

相手の手札は二枚か：

このままだと何もできずに終わる…

一体このデッキはどんなデッキなんだ？

決闘者

「青眼征竜…」

一時期環境をとつていた征竜デツキ：

制限や禁止をくらつて落ち着いたとはいえ

相当な制圧力だな、早めになんとかしないと…

ヴエルズってどんなデツキなんだろう。

見た限りではランク4エクシーズデツキだとは思うんだけど。

「つ、僕は手札からヴエルズ・サンダーバードを召喚する。」

僕の目の前に鳥…とは言い難いおぞましい生物が現れた。

「ヴエルズ？なんだそのカード？」

攻撃力1650？中途半端な奴だな…

それでも俺のドラゴンには届かないぜ。」

確かに攻撃力は全然足りない…

でも、このカードがあれば、

「相手のフィールドに自分より多くのモンスターが存在する時、手札からヴエルズ・

マンドラゴを特殊召喚する。」

これでレベル4のモンスターが2体揃つた。

でも、エクストラには何が…

…バハムート…これがあれば…

「僕は二体のモンスターでオーバレイネットワークを構築。」

僕の前に光の渦が現れる。

二体のモンスターは黒い光となつてその光の渦に吸い込まれる…

「エクシーズ…だと？」

てめえ、エクシーズモンスター持つてやがったのか。」

「エクシーズ召喚 現れよヴエルズ・バハムート！」

大きな羽を広げた龍が姿を現す…

「僕はヴエルズ・バハムートの効果発動。

オーバーレイユニットを一つ使い、手札からヴエルズと名のつくモンスターを墓地に捨てることで相手モンスターのコントロールを得る。」

「な…なんだ…なんだその効果は…」

「僕が選択するのは青眼の白龍！」

ヴエルズ・バハムートが青眼の白龍を捕まえる…

白きドラゴンは黒き影に侵食され黒いドラゴンとなる。

青き眼は赤き眼となりバハムートに操られる。

「いけ、青眼の白龍 レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンに攻撃。 侵略のバーストストリーム！」

操られた青眼の白龍は仲間を攻撃する。

8000→7800

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド。」

ふう、これで少しほは…

「俺のターンドロー。」

俺は竜の渓谷の効果発動。

手札から爆弾竜タイダルを墓地に送りデッキから焰弾竜ブラスターを墓地に。」

やばいな：タイダルとブラスターを出されてNo. 11をだされたら厄介だな。
↙ヴエルズ・バハムート↙

エクシーズ・効果モンスター

ランク4／闇属性／ドラゴン族／攻2350／守1350

「ヴエルズ」と名のついたレベル4モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、

相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

手札から「ヴエルズ」と名のついたモンスター1体を捨て、

選択した相手モンスターのコントロールを得る。

「俺は手札から調和の宝札を発動。

手札から伝説の白石を捨てて二枚ドローする。」

「墓地の伝説の白石の効果発動。」

デッキから青眼の白龍を手札に加える。」

やばいな…これで二体の召喚条件が整つたか…

「墓地の焔征竜ブラスターの効果発動。」

墓地の伝説の白石と手札のデブリドラゴンを除外して特殊召喚する。

さらに墓地の瀑征竜タイダルの効果発動。

手札の青眼の白龍とガード・オブ・フレルベルを除外して特殊召喚！』

2体の竜が雄叫びをあげて現れる。

炎の竜と水の竜…相反する二体の竜が降臨する。

空の覇権を争うように…

「バトルだ！俺は焔征竜ブラスターでヴエルズ・バハムートを攻撃。』

ん？ エクシーズはしないのか：

黒い侵略の竜に焰の竜が襲いかかる。
侵略の竜はなすすべもなく倒される。

8 0 0 0 → 7 5 5 0

「俺はこれでターンエンド…」

エクシーズはしないのか？

相手のターン終了時に手札に戻ってしまう征竜はデメリットをなくすためにエクシーズするのが基本なのに…

「僕のターン

僕は手札からヴエルズ・ケルキオンを召喚。」

二本の杖を持つた人型のモンスターが現れる。

その姿は他のヴエルズと違い恐ろしくはなかつた。

侵略の龍

「僕はヴエルズ・ケルキオンを召喚。」

二つの杖を持つ魔法使いが現れる。

「ヴエルズ・ケルキオン！」

効果モンスター

星4／闇属性／魔法使い族／攻1600／守1550

自分の墓地の「ヴエルズ」と名のついたモンスター1体をゲームから除外することで、自分の墓地の「ヴエルズ」と名のついたモンスター1体を選択して手札に加える。

「ヴエルズ・ケルキオン」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

また、この効果を適用したターンのメインフェイズ時に1度だけ発動できる。

「ヴエルズ」と名のついたモンスター1体を召喚する。

このカードが墓地へ送られたターンに1度だけ、

「ヴエルズ」と名のついたモンスターを召喚する場合に必要なリリースを1体少なくする事ができる。

「僕はヴエルズ・ケルキオンの一つ目の効果発動。」

墓地に存在するヴエルズ・サンダーバードを除外することで、墓地に存在するヴエルズ・マンドラゴを手札に加える。」

「ヴエルズ・ケルキオンが片方の杖を振りかざす。」

ヴエルズ・サンダーバードは黒い光となり異次元の狭間に吸い込まれる。

ヴエルズ・ケルキオンがもう片方の杖を振りかざすと、ヴエルズ・マンドラゴは白い光となつて僕の元へやつてくる。

「僕はヴエルズ・ケルキオンの二つ目の効果発動。」

一つ目の効果を使つたターンに、もう一度ヴエルズモンスターを通常召喚することができる。

「僕はヴエルズ・カストルを召喚する。」

ヴエルズ・ケルキオンがその杖を振り上げると、鎧をきた侵略のモンスターが現れる。

「僕はヴエルズ・カストルの効果でもう一度通常召喚を行える。」

僕は先ほど手札に戻したヴエルズ・マンドラゴを通常召喚。」

カストルとともにマンドラゴも現れる。

「まさか…またエクシーズをするつもりか?」

「てめえ、いつたい何体エクシーズモンスターを持つてやがる…」

…どういうことだろう、あいつはエクシーズモンスターを持つていなか?

それなら前のターンエクシーズしなかつた理由も分かる。

そんな事よりも今はこの決闘に集中しなければ：

「僕はレベル4ヴエルズ・ケルキオン、カストル、マンドラゴの三体でオーバーレイネットワークを構築…」

三体のモンスターは、光の渦へ巻き込まれる。

「エクシーズ召喚。

現れよ、ヴエルズ・ウロボロス！」

光の渦の中心から大きな光の柱が現れ、三つの頭を持つ龍が現れる。
不滅、永遠、無限を象徴する龍：

その姿は恐ろしく邪悪だった。

「僕はヴエルズ・ウロボロスのモンスター効果発動。

オーバーレイユニットを一つ使い、相手フィールドに存在するカード一枚を手札に戻す。

僕は焰征竜ブラスターを選択。」

ヴエルズ・ウロボロスの咆哮とともに焰征竜ブラスターは悶え苦しみ、そして消えていく。

「いけ、青眼の白龍。

瀑征竜タイダルに攻撃。」

水の竜はなすすべもなく黒き龍に倒される。

7800→7400

「ヴエルズ・ウロボロス、プレイヤーにダイレクトアタックだ。」

三つの頭を持つ邪悪な龍は、その三つ全ての口から黒い炎の球を出し相手プレイヤーに炸裂させる。

7400→4650

ヴエルズ・ウロボロスの咆哮とともに墓地のレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンが異次元に吸い込まれる…。

「ぐ…俺が押されているだと…。」

「僕はこれでターンエンドだ。」

「だが、次のターンでてめえの全てを破壊してやる。」

「征竜ならできるだろうな…このターン耐え切れるかな…。」

「俺のターン…ドロー。」

…今引いたこのカードでてめえに勝つ。」

今引いたカード…、なんだろう。

「俺は手札から速攻魔法発動、異次元からの埋葬。

俺は除外されている伝説の白石、嵐征竜テンペスト、青眼の白龍を墓地におくる。」「伝説の白石の効果でデッキから青眼の白龍を手札に加える。」

「俺は、竜の渓谷の効果発動。

手札から嵐征竜ブラスターを墓地に送り、デッキから巖征竜レドックスを墓地に捨て
る。」

「さらに、墓地の嵐征竜ブラスターの効果発動。

嵐征竜テンペストと、レドックスを除外して特殊召喚する。

除外したレドックスと、テンペスト効果でデッキから幻木竜と、デブリ・ドラゴンを手札に加える。」

「そして、墓地の嵐征竜タイダルの効果発動。

手札のデブリ・ドラゴンと墓地の伝説の白石を除外して特殊召喚する。」

「最後に、幻木竜を通常召喚。」

幻木竜の効果発動、俺のフィールドに存在する嵐征竜タイダルとレベルを同じにする
ことができる。」

「なんで青眼の白龍とレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンを除外しないんだ

。」

何か理由でもあるのか…?

「俺は一体の征竜と、レベル7となつた幻木竜で、オーバーレイネットワークを構築…、エクシーズ召喚！」

現れよN.O. 7ラツキー・ストライプ！」

ラツキー・ストライプ…どんな効果なんだろう。

「俺はN.O. 7ラツキー・ストライプのモンスター効果発動。

オーバーレイユニットを一つ使い、ダイスを二回ふる。

このカードの攻撃力は次の相手のターン終了時まで出た目×700の数値になる。さらに二つのダイスの目の合計が7だつた場合、

このカード以外のフィールド上のカードを全て墓地へ送る。

手札または自分・相手の墓地からモンスター1体を特殊召喚する。

デッキからカードを3枚ドローし、その後手札を2枚選んで捨てる。のうちから一つ選んで発動することができる。」

…まさか、レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンをとつていた理由は…。

「ようやく気付いたか、これで合計が7だつた場合お前は大ダメージを受けるぜ。」「てめえを殺すためのダイスロール…。」

大きな二つのサイコロが宙を舞う。

そのサイコロは地面にぶつかった後少し回って動きを止める。
出た目は……つ。

2、5

「つ……。」

「ククク、残念だつたな…高い方の目は5、合計は7だ。
よつて効果を発動させてもらうぜ。」

N O. 7 ラツキー・ストライプの攻撃力は3500となる。

さらに合計が7だつたことによつてもう一つの効果発動。
自分の墓地からレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンを特殊召喚するぜ。
そして、レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンの効果で手札の青眼の白龍を特殊
召喚する。」

くつ：攻撃力3500のモンスターに青眼の白龍が並んだ…。

「さあ、バトルだ。」

俺はN O. 7 ラツキー・ストライプで青眼の白龍を攻撃。」

ダイスの魔術師ラツキー・ストライプの攻撃は青眼の白龍を貫く。
7550→7050

「まだだ、まだ終わらねえぜ。」

青眼の白龍でヴエルズ・バハムートを攻撃。

滅びのバーストストリーム！」

7050→6800

「つ…ウロボロス…」

「これが最後の攻撃だ。

レッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンでめえを攻撃。」

真紅の鎧を纏つた龍が襲いかかってくる…

6800→4000

「ライフ差が逆転しちまつたなあ。

残念だつたな、せつかく出したてめえの龍も1ターンでやられちまつて。
…どうするつ、このままあいつにターンを渡したら…。

僕は…勝てないのか、あいつに…。

「僕の…ターン、ドロー。」

「…俺はモンスターを伏せて…カードを一枚伏せて、ターンエンド。」

「ククク、打つ手なし…つてところか。

それなら遠慮なく潰させてもらうぜ。」

「俺のターン、ドロー。」

「俺は、N.O. 7ラツキー・ストライプの効果発動。

さあ、ダイスを振らせてもらうぜ。」

サイコロは宙を舞い、やがて地面に落ちる…

出た目は……。

1、2

「チツ、命拾いしやがつて…。

まあ、いい俺はレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンの効果発動。」

「僕はそれにチエーンして、手札のエフェクト・ヴェーラーの効果を発動し、その効果を無効にする。」

「面倒なカードを使いやがつて…

まあいい、バトルだ。」

「俺はレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンでセットモンスターを攻撃。」

「俺はヴエルズ・アザトホースのリバース効果発動。

特殊召喚されたモンスターをデッキに戻す。

俺が選択するのはN.O. 7ラツキー・ストライプ。」

うねりながら姿を変える冒涜的なそのモンスターはその触手でラツキー・ストライプ

を引きずりこむ。

そのあと、アザトホースは真紅の龍に焼き尽くされる…。

「まだ、攻撃は残つてゐるぜ。」

俺は青眼の白龍でてめえを攻撃。」

「くつ、まだ…」

40000→10000

「残りライフは10000…これじやあ俺には勝てねえなあ。」

「がんばつて下さいつ。」

「つ…。」

僕の目に映るのは、さつきの少女…

そうだ…僕は彼女のために…。

「負けるわけにはいかない…、俺のターン…ドロー。」

引いたカードはヴエルズ・ケルキオン…、これならいける。

「僕はヴエルズ・ケルキオンを召喚。」

ヴエルズ・ケルキオンの効果を発動する。」

ヴエルズ・ケルキオンが杖を振りかざす。

「墓地からヴエルズ・カストルを手札に加える。

さらに、ヴエルズ・カストルの効果でヴエルズ・カストルを召喚する。そして、ヴエルズ・カストルの効果で手札からヴエルズ・ヘリオロープを召喚。」

「また、ヴエルズ・ウロボロスを召喚するつもりか?」

そんなんじや俺のモンスターには勝てねえぜ。」

そう…僕のモンスターじゃ勝てない…だから僕は。

「僕は伏せてあつたトラップカード侵略の侵食崩壊の効果を発動する。」

僕の目に一瞬、侵略の龍と光の龍が見えた…。

「僕はヴエルズ・ケルキオンを除外して、青眼の白龍とレッドアイズ・ダークネスマタルドラゴンを手札に戻す。」

「チツ、俺の龍が…。」

「ヴエルズ・カストルと、ヘリオロープでダイレクトアタック。」

4 6 5 0 → 3 7 0 0

3 7 0 0 → 1 9 5 0

「残念だつたなあ、このターン中に倒せなくて…。」

「それは…どうかな?」

僕はヴエルズ・カストルと、ヘリオロープでオーバレイネットワークを構築…。」

光の渦に黒い光が巻き込まれる…

「エクシーズ召喚。

侵略の龍ヴエルズ・オピオン!」

世界を闇に染める侵略の龍が現れる。

「たかが、攻撃力2550のモンスターで何ができる…。」

「エクシーズ素材を持つたヴエルズ・オピオンがフィールド上に表側で存在する時、レベル5以上のモンスターを特殊召喚することはできない。」

「な…なんだ？ それじやあ俺のモンスターは…。」

「その通り：君の征竜は召喚できなくなる。」

「僕はこれでターンエンド。」

「俺のターン、ドロー……クソツ、ターンエンド。」

「それじやあ僕のターンだ。」

ヴエルズ・オピオンでダイレクトアタック。」

1950→0

「俺が…負けた…だと。」

決闘の決着を告げるブザー音が鳴り響く。

「勝つた…勝てたんだ。」

…そうだった…彼女のカードを返してもらわなきや…。

「おいつ、てめえ。」

「はい…。」

「ほらよ…、奪つたカードだ。」

「これでいいんだよな。」

「はい、ありがとうございました。」

「チツ、調子狂うな…。」

それじゃあな」

と言つて彼は去つて行く。

「はい、このカードだよね？ ギミックパペツト—ネクロドール。」

「はい…あの、ありがとうございました。」

「それと…借りたデュエルディスク、ありがとうございます。」

「あの……私に何かできることはありますか？」

「恩返しとか…したいので…。」

「え、いや、んーと、じゃあ…、この世界について教えてもらえるかな。」

「この世界のこと…ですか。」

「実は…僕はこの世界とは違う世界から来たんだ…。」

信じてもらえるの…かな？」

「えっと、ここじゃ話しづらいので私の家でもいいですか。」

「えっと、君がいいなら…。」

「はい、…そういえば自己紹介してませんでしたね。」

「僕の名前は天野 茜 です。」

「僕の名前は真月 幽斗 よろしく…。」

「はい、よろしくお願ひします。」

傀儡使い

「この世界のことを説明…意外と難しいですね。」

「ごめん、無理なお願いしちゃつて…」

「んー、どうしましよう……そうだ。」

真月さんは元の世界ではどんなデツキを使つてたんですか。」

「僕は元の世界では、ガガガデツキを使つてたよ。」

「ガガガ…ですか…。」

聞いたことのないデツキですね。

具体的にはどのような動き方をするのですか。」

どうやらガガガデツキも知られていないようだ。

この世界：一体どんな世界なんだろう。

「ガガガデツキはレベルを1から10まで変動させてエクシーズ召喚をするデツキ…
かな。」

「エクシーズ召喚…。」

その召喚方法が真月さんの世界では流行してるんですか？」

「ううん、僕のいた世界では融合もシンクロも、エクシーズも使われていたよ。」

「この世界では、エクストラを多用するデッキは好まれていません。」

「どういうこと?」

「エクストラモンスターの値段が高くて手が出せないです。」

持つてるとしても一人一枚か二枚……さつきの人もN.O. 7ラツキー・ストライプの一枚……。

真月さんみたいに3つも持つてる人は少ないんです。」

「なるほど……だからあの時幻獣機ドラゴサックやN.O. 11ビツクアイを召喚しかつたのか……。」

「私も、このギミックペペット——ジャイアントキラー、ギミックペペット——シリアルキラーの二枚しか持つてません。」

「なるほど……ってことは暗黒界とか、征竜、炎王、ライトロード、魔導、銀河などが流行つてるのかな。」

「はい、その通りです。」

「…………あれ? そういえば……。」

「どうかしたの?」

「真月さん……、今日、この世界にきたんですか。」

「うん、そうだよ。」

「泊まるところとかって、ありますか。」

……忘れてた…。

僕、今住むところないじやん…。

「あつ…どうしよう、忘れてた。」

「よかつたらここに泊まりませんか？一人暮らしなので空いてますし…。」

「えつと、いいの？」

「はい、大丈夫です。」

「ありがとうございます…天野さん。」

「茜…でいいですよ。」

「そつか、じやあ僕のことは幽斗って呼んでくれるかな。」

「はい、……それじやあ幽斗さん

デュエルしませんか。そのデッキ…面白そうなので。」

「デュエル…いいよ、やろうか。」

「幽斗さん私の昔使っていたデュエルディスクを使つてください。今からとつてきま

す。」

茜さんが自分の部屋からデュエルディスクをとつてくれた。そのデュエルディスクは使い込まれていた。茜さんデュエルが好きなんだろうな…。

「それじゃあ始めましょう。」

『デュエル！』

「先攻と後攻どちらがいいですか。」

「うーん、それじゃあ後攻で…。」

「わかりました。」

それでは私のターン。』

「私は手札からトレード・インを発動します。」

手札からギミックパペット—ネクロドールを墓地に送り、一枚ドローします。』

「幽斗さん、これから私のファンサービスが始まりますよつ。」

ファン…サービス…つて。

ギミックパペット…だから？

「私は手札からギミックパペット—ボムエッグを召喚します。』

ボムエッグの効果で手札からギミックパペット—ギアチエンジヤーを捨ててレベルを8にします。』

墓地に存在するモンスターが全て機械族のため、手札からネジマキシキガミを特殊召

喚します。」

「ボムエッグ、ネジマキシキガミの二体でオーバーレイネットワークを構築。エクシーズ召喚現れる、No.15! 地獄からの使者、運命の糸操る人形…。ギミック・パペツト—ジャイアントキラー!」

心臓のような物体が姿を現す。

やがてその姿は玉座に座る王の姿に変わる。

全てを支配するような狂気の王…。

その玉座は全てを飲み込み、粉碎する。

「私はジャイアントキラーを守備表示で召喚します。」

「カード一枚伏せて、ターンエンド。」

「ファンサービスつて…。」

「これから見せます!」

「じゃあ、僕のターンだね。ドロー。」

「僕は手札からヴエルズ・カストルを召喚する。」

さらに、ヴエルズ・カストルの効果でヴエルズ・サンダーバードを召喚。「ヴエルズ・カストルと、サンダーバードでオーバーレイネットワークを構築：エクシーズ召喚。

現れよ、ヴエルズ・バハムート！」

「ヴエルズ・バハムートの効果発動。

オーバーレイユニットを一つ使い、手札からヴエルズとのつくモンスターを手札から捨てることで、相手モンスターのコントロールを得る。僕が対象にするのはギミック・ペペツトージャイアントキラーだ。」

「私はその瞬間、罠カード強制脱出装置を発動します。

私が対象にするのは、ギミック・ペペツトージャイアントキラーです。」

「ギミック・ペペツトージャイアントキラーを対象にするの…？」

「はい、そうですよ！」

「それじゃあ、バトル。

僕はヴエルズ・バハムートでダイレクトアタックする。」

8000→5650

「うう…結構くらつちやつたな…。」

「僕はカードを一枚伏せて、ファイールド魔法混沌空間を発動。」

周りが異次元空間に変わる。

次元の狭間がいくつも現れ、渦巻く。

「僕はこれでターンエンド。」

「私のターンですね。ドロー。」

私は墓地のギミック・ペペット—ネクロドールの効果発動。墓地のボムエッグを除外して特殊召喚します。」

「この瞬間、混沌空間にカオスカウンターが1たまります。」

墓地から除外されたボムエッグは新たに出来た次元の狭間に吸い込まれる。

「さうに、手札からギミック・ペペット—ギアチエンジャーを召喚。ギアチエンジャーの効果でネクロドールと同じレベル8にします。」

「…」のために強制脱出装置で戻したのか。」

「はい、負けませんよ。幽斗さん！」

「ギミック・ペペット—ネクロドールと、ギアチエンジャーの二体でオーバーレイネットワークを構築：エクシーズ召喚。現れよギミック・ペペット—ジャイアントキラー

！」

再び狂気の王が再来する。

その姿は冒涜的で恐ろしかつた。

「私はギミック・ペペツトージャイアントキラーの効果発動。オーバーレイユニットを一つ使い相手フィールドのモンスターを破壊する。破壊したモンスターがエクシードモンスターだつた場合、そのモンスターの元々の攻撃力分のダメージを与えます。私は、ヴエルズ・バハムートを破壊します。デストラクション・キャノン！」

その王の指から出る紐にヴエルズ・バハムートは捕らわれ引き摺り込まれる。ヴエルズ・バハムートは玉座に飲み込まれ粉砕される。

それだけじゃない：粉砕されたヴエルズ・バハムートは、弾丸となつて僕を襲う。

8000→5650
「ぐつ…強いね…」

「まだまだこれだけでは終わりませんよ。

私は装備魔法工クシードユニットを発動。

エクシードユニットをギミック・ペペツトージャイアントキラーに装備します。この効果により、攻撃力は1600上がり3100になります。」

「高ランクモンスターであることを活かしての戦法か…」
「はい、それではギミック・ペベット—ジャイアントキラーでダイレクトアタックします。ファイナルダンス！」

5650→2550

「一気に削られちゃつたか…。」

「私はこれでターンエンドです。」

「僕のターン、ドロー。」

うーん、どうしよう…。

僕はヴエルズ・サンダーべードを召喚。」

「うう…何もできないや。ターンエンド。」

「私のターンですね。」

それでは、バトルです。

私はギミック・ペベット—ジャイアントキラーでヴエルズ・サンダーべードを攻撃。」

「僕は罠カードフォーチュン・スリップを発動する。その攻撃を無効にし、ジャイアントキラーアルマーズを除外する。」

さらに、その発動にチエーンして、ヴエルズ・サンダーべードを除外する。そのことによつて、混沌空間にカオスカウンターが一つ乗り、さらにジャイアントキラーが除外

されたことでカウンターがもう一つ乗る。」

「むむう…止められちゃいましたか…。」

それではモンスターを一枚伏せて、ターンエンドです。」

「さてと、僕のターンだ。」

スタンバイフェイズにヴエルズ・サンダーバードは攻撃力1950となつてファイールドに戻つてくる。」

「僕は手札からヴエルズ・ケルキオンを召喚する。
ヴエルズ・ケルキオンの効果発動。

墓地のヴエルズとのつくモンスターを除外し、墓地のヴエルズとのつくモンスターを手札に加える。

僕はヴエルズ・サンダーバードを除外して、ヴエルズ・カストルを手札に加える。

ヴエルズ・ケルキオンの効果でヴエルズ・カストルを召喚。ヴエルズ・カストルの効果でヴエルズ・サンダーバードを召喚。」

「僕は、ヴエルズ・ケルキオンとヴエルズ・カストルでオーバーレイネットワークを構築…エクシーズ召喚。

現れよ、ヴエルズ・オピオン！」

光の渦とともに、侵略の龍が現れる。

「さらに、ヴエルズ・サンダーバード一体でオーバーレイネットワークを構築…エクシーズ召喚。

現れよ、N.O. 103 神葬零嬢ラグナ・ゼロ！」

「オーバーハンドレッドナンバーズ…。」

幽斗さんが持つてたなんて…」

「僕は禁じられた聖槍を発動。」

対象はジャイアントキラーだ、このことによつて攻撃力は800下がる。」

「僕はN.O. 103 神葬零嬢ラグナ・ゼロの効果発動。」

ガイダンス・トウ・フューネラル！

攻撃力の変動しているギミックパペツト—ジャイアントキラーを破壊して、一枚ドローする。」

「僕は…カードをセットする。」

バトルだ、ラグナ・ゼロでセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターのリバース効果発動。」

リバース効果…なんだ？

「メタモルポットの効果で、お互い手札を全て捨てて5枚ドローする。」

「…メタモルポットか…。」

「ヴエルズ・オピオンでダイレクトアタック。」

5650→3100

「僕はカードを三枚伏せて、ターンエンド。」

「オピオン状況下でどう戦うか…。悩みますね…。」

「私のターン、ドロー。」

「私は手札から貪欲な壺を発動。」

墓地のギミックパペット—ジャイアントキラー、ネクロドール、シザーアーム、ネジマキシキガミ、ギアチエンジャーをデッキに戻してシャツフルします。」

「貪欲な壺の効果で一枚ドロー。」

「私は手札からギミックパペット—ボムエッグを召喚。」

さらに、ギミックパペット—ボムエッグの効果で手札からネクロドールを捨てて、ベルを8にします。」

「何を…するつもり…つて、まさか…。」

「そのまさかです。」

私は手札から二重召喚を発動します。この効果により、通常召喚を二回行なうことができます。

私は手札からギミックパペット—ギアエンジヤーを召喚。

効果で、ボムエッグと同じレベル8にします。
ギアエンジヤーと、ボムエッグでオーバーレイネットワークを構築：エクシード召喚。

現れよ、ギミックパペット—ジャイアントキラー。」

「ギミックパペット—ジャイアントキラーの効果発動。
オーバーレイユニットを一つ使い、特殊召喚された相手モンスターを破壊、そのモンスターがエクシードモンスターだった場合元々の攻撃力分のダメージを受けてもらいます。今、幽斗さんのライフは2550、ヴエルズ・オピオンの攻撃力は2550。ダメージを受けてもらいますよ、幽斗さん！」

「オーバーレイユニットを一つ使い効果発動。

ヴエルズ・オピオンを破壊：デストラクションキヤノン！」

「させない！、僕は速攻魔法禁じられた聖衣を発動。

このターンヴエルズ・オピオンは攻撃力が600下がり、効果の対象にならず、効果では破壊されない。」

「まだ、終わりませんよ。

私は残るオーバーレイユニットも使い、No.103神葬零嬢ラグナ・ゼロを破壊：

デスマクラクションキヤノン！」

ラグナ・ゼロはジャイアントキラーの操る糸に捕まり粉碎される。粉碎されたラグナ・ゼロは砲弾となり襲いかかる。

2550→150

「ギリギリ耐えられましたか…。

それじゃあ、私は手札からエクシーズユニットを発動。
ジャイアントキラーの攻撃力は3100になります。

バトルです！ジャイアントキラーでヴエルズ・オピオンに攻撃。ファイナル・ダンス

！

狂気の王が襲いかかる。

侵略の龍はなすすべもなく飲み込まれ破壊される…。

「まだだ…、罠カード陰謀の盾を発動！

ヴエルズ・オピオンに装備し、1ターンに一度戦闘破壊と戦闘ダメージを無効にする。」

「私は速攻魔法RUMクイック・カオスを発動！

No.15ギミックパペツト—ジャイアントキラーのオーバーレイネットワークを

再構築：カオスエクシーズチェンジ！」

「現れろ、C N O. 15! 人類の英知の結晶が、運命の糸を断ち切る使者を呼ぶ! ギミック・ペペツト—シリアルキラー!」

焰を統べる者

「私は速攻魔法RUMクイック・カオスを発動！」

N.O. 15 ギミックペベット—ジャイアントキラーのオーバーレイネットワークを再構築・カオスエクシードチエンジ！」

「現れる、C.N.O. 15！人類の英知の結晶が、運命の糸を断ち切る使者を呼ぶ！ギミック・ペベット—シリアルキラー！」

「行きますよ。ギミック・ペベット—シリアルキラーで、ヴエルズ・オピオンを攻撃！ジエノサイド・ガトリング・バースト！」

シリアルキラーの口からガトリングが出てくる。

そのガトリングはヴエルズ・オピオン容赦無く襲う。

「まだだ、まだ…終わらない！」

僕は罠カードデモンズ・チエーンを発動。

ギミック・ペベット—シリアルキラーは効果無効となり、表示形式の変更もできず、バトルも行えない。」

「メタモルポットが裏目に出ましたね…。まさか耐えられちゃうなんて…。

私はもう一回エクシードユニットを発動。

これによつてギミック・パペツトーシリアルキラーの攻撃力は4300になります。カードを一枚伏せて、ターンエンド。」

「…僕の…ターン、ドロー。」

4300…突破するにはもう、ヴエルズ・ウロボロスしか…。
ダメだ…今の手札じゃとてもじやないけど召喚できない…。この三枚だけで突破するには……

…混沌空間？

そうだ、今混沌空間にはカウンターが三つ乗つている…。
これをうまく使えばどうにか…。

「よし、僕は手札からヴエルズ・ケルキオンを召喚。

ヴエルズ・ケルキオンの効果で墓地のヴエルズ・カストルを除外してヴエルズ・サンダーバードを手札に加える。カードが除外されたことによつてカオスカウンターは一つたまり四つとなる。」

「さらにその効果で手札に加えたヴエルズ・サンダーバードを通常召喚。」

「僕は混沌空間の効果発動。カオスカウンターを四つ取り除き、除外されているヴエルズ・カストルを特殊召喚。」

「いくよ、僕はヴエルズ・サンダーバードとカストルと、ケルキオンの三体でオーバーレイネットワークを構築…エクシーズ召喚。現れよ、ヴエルズ・ウロボロス！」

「ヴエルズ・ウロボロスの効果発動。オーバーレイユニットを一つ使いフィールド上のカード一枚を手札に戻す。

僕が選択するのはギミック・パペツト―シリアルキラー！」

侵略の龍が狂気の王を侵食する。

狂気の王は消え去り残るのは無。

「僕はヴエルズ・ウロボロスでダイレクトアタック！」

「それでも、とどめはさせませんよ。幽斗さん！」

「いや、とどめはさせる。

僕はダメージステップ時に伏せてあつた速攻魔法を発動する。禁じられた聖杯！

この効果により、ヴエルズ・ウロボロスは攻撃力が400上がり、効果は無効となる。」

「これでちょうどとどめをさせる。

「いけ、ヴエルズ・ウロボロス！」

3100→0

「…………、負けちゃいましたね。

やつぱり幽斗さんは強いですね。」

「茜さんだつて強いじゃないですか…。」

残りライフ150になつちやいましたし…。」

「ううー、でも負けは負けです。」

幽斗さん、また決闘しましようね。次は勝ちます!」

「うん、また決闘しよう。」

……つそだ、これ…。」

僕は彼女にデュエルディスクをさします。

「これは幽斗さんにあげます。」

使わないでいても勿体無いですし。」

「ありがとう……んー、これじやあ僕助けてもらつてばかりだなあ」

「私だつて幽斗さんに助けてもらいましたよ。」

あの時はとても嬉しかつたです。かつこよかつたですよ。」

僕は顔が真つ赤になるのを感じた。

こんなこと言われるのは初めてだ。

それも…こんな可愛い女の子に。

「ふふつ、それじやあご飯を食べてお風呂に入つて寝ましょうか。明日も幽斗さんに
教えたいことがあるので。」

「…なんかお母さんみたいだね。」

「そ…そうですか？うーん、お母さんかあ。

それなら…「幽斗さん！早く寝ないとダメですよ！」とか行つて見ましょうか？」
「えつ…と…。」

「うふふ、冗談です。」

そんな話をしながら僕は…いや、僕たちは楽しいひと時を過ごした。

「幽斗さーん、起きてください。」

朝、僕は起こされる。

朝に強い方ではない僕は朝起きることが難しい…。

布団から出ることが億劫になりがちだ。

このまま寝ていたい…そう思つていた。

「早く起きてください！」

布団が引き剥がされる。

同時に寒さを感じる。

眠気は寒さに勝てず、眠気は消え去る。

「ま…まだねむい…。」

「幽斗さん…もう8時ですよ。」

僕は時計を見る。

その短針は8の文字を指している。

昨日何時に寝たっけ…、確かに8時には寝たような気がするんだけど。

「もしかして12時間も寝ちゃつたの？」

「はい、疲れていたんでしようね。ぐつすり眠つてましたよ。」

「迷惑…かけちやつたかな？」

「いえいえー、そんなことはありませんよ。

それじゃあ幽斗さん、食事にしましよう。」

見た目は綺麗だつたが味は表現しづらい味だつた。

なんていうのか…温かいものと冷たいものを同時に食べているような味だつた。

「幽斗さん、今日はデパートに行きましょか。」

急に言われて僕は戸惑う。

「デ…デパート？」

「はい、幽斗さんの服とかも買わなきゃいけないですしどう。」
「…服…忘れてた。

僕は今着ている服と、デツキ以外の物を何も持っていない。
本当にこの世界で生きていけるのかなあ。

不安になつてきた。

「それじゃあ、行きましょうか。」

僕たちはデパートに行つてたくさん買い物をした。

僕が学んだこと…それは、女の子の買い物はとても長いことだった。
「これで…何回目なんだろう…。」

「これがいいですかねえ…いや、でもこっちの方が…。」

ダメだ、僕は諦めることにした。

僕は店を出てデパートを見渡してみた。

飲食店、本屋、いろいろある。

でも、僕は一つの店に目がいつた。

「カードショッピング…、こんなところにもあるんだ。」

「そうですよ。カードショッピングはいろいろなところにありますけどここはその中でも

一番大きいところですよ。行つてみましようか。」

「あ、買い物は終わつたの?」

「はい、ニンジンとかジャガイモとか買つてきました。」

カードショップの入り口には大会出場受付中…との文字が書かれていた。それとともに色々な詳細が書かれていた。

「優勝商品は、神竜騎士フェルグラントか…。」

僕のデッキには入らないか…。

あつ、でも茜さんのデッキには入るよな。

「幽斗さん、この大会に出たいんですか?」

「え、うーん、出てみようかな。

そういえば、このフェルグラントってどのくらいの値段なの?」

「確か…1万は超えますよ。」

僕の世界より10倍以上高いのか…。

この世界にいると金銭感覚が麻痺しそうだ。

この世界のことも知りたいし、僕は大会に出ることにした。

受付で大会出場費を払つてエントリーした。

人数が集まると、ソリッドビジョンによつて戦う順番が表示された。最初の相手は：
烏丸 焰 どんなデッキを使うんだろう。大会は中央のステージでソリッドビジョン
を使つて戦うらしい。僕の順番は3戦目だ。

始まつてから5分ほどして、ギヤラリーも集まつた頃に一戦目が始まつた。

一戦目マシンナーズギアガジェット対暗黒界

マシンナーズフォートレスで奮闘するが、暗黒界の龍神グラファに攻撃力で負け、そ
のまま勝負がついた。

暗黒界の勝利。

二戦目は森羅対スキドレバルルバ

スキルドレインを使つて有利に進めていくが、森羅の靈峰で森羅の影胞子ストールの
効果を発動させ、スキルドレインを破壊。

森羅の勝利。

三戦目：僕の番だ。

相手はどんなデッキなんだろう…。

僕はステージに登りデュエルディスクをセットする。

ソリッドビジョンにより世界が再構築される。

僕たちは試合前の挨拶を済ませ、向かい合つた。

先攻は僕、相手は後攻となつた。

『デュエル！』

手札は…悪くはない。

「僕は、レスキューラビットを召喚。

レスキューラビットの効果発動、このカードを除外してデッキから同名の通常モンスター二体を特殊召喚する。

僕はヴエルズ・ヘリオローブ二体を特殊召喚。」

「二体のヴエルズ・ヘリオローブでオーバーレイネットワークを構築：エクシーズ召喚。」

光の渦に黒い光となつたヘリオローブが吸い込まれていく。

「現れよ、ヴエルズ・オピオン。」

侵略の龍の召喚と同時に周りが騒がしくなる。

どうしたんだろう…、僕：何かしたかな？

少し考えていると、デュエルディスクから画面が現れる。そこに映つていたのは茜さ
んだ。

「幽斗さん…ちよつといいですか？」

「あ、うん。これどうしたの？」

「幽斗さんの召喚したヴエルズが珍しいんだと思ひます。あまり目立たないようにしてくださいね。」

「絡まれると面倒な人たちもいますので。」

「えつ…そんな人いるの?」

「前、私が絡まれてたじやないですか。ああいう人たちです。
「わかつた、気をつけるよ…茜さん。」

「それでは大会がんばってくださいね。」

「ヴエルズ…このデッキは一体なんなんだろうか。

いや、そんなことを考えてる場合じゃない。

今はこのデュエルに集中しなきや。

「僕は、ヴエルズ・オピオンの効果発動。オーバーレイユニットを一つ使いデッキから侵略のとなのついた罠、魔法カードを手札に加えることができる。」

「僕が手札に加えるカードは侵略の侵食感染。」

「僕は、カードを二枚伏せてターンエンド。」

「俺のターン、ドロー。」

「ヴエルズ…というのか?そのデッキは…初めて聞いたな。」

「ただ、相手が誰だろうと俺の戦い方は変わらない。」

「俺は手札から忍者マスターHANZOを召喚。効果でデッキから機甲忍法フリーザ・ロックを手札に加える。」

「カードを一枚伏せてターンエンド。」

「それじゃあ、僕のターン、ドロー。」

長引かせたくない…、早めに決着を…。

フリーーズロックは忍者モンスターがないと発動できないカード…、それなら…。

「僕は手札からヴエルズ・カストルを召喚。ヴエルズ・カストルの効果で手札からヴエルズ・ヘリオロープを召喚。」

「二体目のモンスターでオーバーレイネットワークを構築…エクシーズ召喚。現れよヴエルズ・バハムート！」

二体目の侵略の龍：影は濃くなり世界を蝕む。

「…観客がうるさいみたいだな。大丈夫か？」

「え…僕ですか？」

いきなり問われて僕は戸惑う。

そういうえば、こんな大会に出るのは初めてだ。ましてやこんな大勢の観客の前でなんて…。

「ああ、こういうのに慣れてなさそうな顔してるからな。」

「僕つてそんな顔しますか？」

「今度鏡をよく見てみるといい。」

「んー、このデュエルに勝つて鏡を見てきます。」

「ふつ、俺も負ける気はない。」

「僕はヴエルズ・バハムートの効果発動。オーバーレイユニットを一つ使い、手札のヴエルズとのつくモンスターを捨てることで相手モンスターのコントロールを得る。」

「僕がコントロールを得るのは忍者マスターHANZO！」

忍者マスターHANZOは影に侵略され、蝕まれる。

「そうはさせないつ、罠カード発動忍法影縫いの術。」

侵略されたかに見えた忍者が突然消え去る。

「自分フィールドに存在する忍者モンスターをリリースして、相手フィールドに存在するモンスター一体を除外する。俺が選ぶのはヴエルズ・オピオン。」

侵略の龍の背後に突然忍者が現れる。侵略の龍自らの影にとらわれ時空の狭間に吸い込まれる。

「でも、これでフィールドはガラ空きだ。僕はヴエルズ・バハムートでダイレクトア

タツク。』

8000→5650

「僕はこれでターンエンド。』

「これで全ての準備は整つた。』

俺のターンだ、ドロー。』

準備…？どういう意味なんだ…。』

『俺は手札から魔法カード炎王の急襲を発動。自分フィールドにモンスターが存在せず、相手フィールドにモンスターが存在する時デッキから炎属性の獣族、獣戦士族、鳥獣族のモンスターを特殊召喚できる。そのモンスターの効果は無効になり、エンドフェイズに破壊される。』

『現れよ炎王神獣ガルドニクス！』

不滅の焰とともに神の鳥が姿を現す。

オピオンを除外したのはこのためだったのか…。』

『さらに手札から成金忍者を召喚。成金忍者の効果発動、手札からトラップカードを一枚墓地に送ることでデッキから忍者とのつくモンスターを特殊召喚する。』

『俺は、手札からスキルプリズナーを墓地に送りデッキから忍者マスターHANZOを特殊召喚する。』

「さらに、忍者マスターHANZOの効果でデツキから機甲忍者フレイムを手札に加える。」

「二体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築…エクシーズ召喚。現れよ、機甲忍者ブレード・ハート！」